



近江と芭蕉

芭蕉の生誕地について

芭蕉さんの生誕地については、^{かみつげ}上柘植説と上野市赤坂町説の2説があります。柘植説を主張しておられるのが、松尾早次さん、^{すくり}村主種次郎さんらで、この説の初見は、安永7年刊、高橋梨一の「奥の細道菅菰抄」の中に、「祖翁は伊賀國柘植郷の産にして、云々」と書かれています。上野市説を主張しておられるのが、菊山當年男さんらです。また多くの人は、上野市生れと思っておられます。しかし私の縁者である、横光利一氏は、その著「考へる葦」の中の「芭蕉と灰野」の一節の中に「私は母から時々拜野へ使にやらされたが、行く先は松尾字八といふ家であった」と書いています。もちろん拜野とは灰野のことです。私は今日まで何回となく、その両誕生地を訪ねています。いろいろと調べて見ました。私は柘植説を主張したいと思います。いずれにしても伊賀の国のことですし、今後もこつこつと研究したいものです。

芭蕉の誕生日

芭蕉さんは、いつ生れられたか、どの参考

書を見ても、寛永21年・正保元年 甲申 1644年とあって、その月日は書かれていません。たまに「8月15日生」（大磯善雄・白井悌三）との説があります。松尾早次氏の著も、「8月15日」説にきめています。このことも、これからいろいろ研究されることでしょう。奇しくも私は、上野市車坂町で明治37年8月15日生まれました。ついでに、横光利一氏は、私の祖母の妹（小菊）の息子です。

近江と芭蕉

芭蕉さんが、近江に旅の杖を入れたのは、貞享2年春のことで、最初の作品、「甲子吟行」に「大津に出づる道、山路を越えて、と前書して、

山路来てなにやらゆかしすみれ草とあります。芭蕉は近江路を尾張に出て、江戸に帰る道であったのでしょうか。芭蕉が通ったのは多分、藤尾から小関越ではなかったかと、いわれています。

次に湖水眺望の句があります。

唐崎の松は花より臃にて 芭蕉

唐崎の松は近江八景「唐崎の夜雨」として名高く、大津の干那亭あたりから、それと指さすことが出来ます。「甲子吟行」では、芭蕉は水口へ出る道、「昼のやすらひと、旅店に腰をかけて、と記し、つつじいけて。其蔭に干鱈さく女 芭蕉水口の手前、石部の茶店での作といわれてい



「芭蕉翁誕生之地」
上野市赤坂町



かきあげ城址「芭蕉翁誕生宅址」
伊賀町上柘植





からさきの松は花より臍にて
唐崎神社内



四方より花吹き入て鳩の海
御殿浜



命二ツの中に生たる桜哉
水口町大岡寺

ます。この句碑は現在、石部町真明寺境内に建っています。次の宿場、水口では、土芳にめぐり逢い、

命二ツの中に生たる桜哉 を詠んでいます。この句碑は現在、水口町大岡寺境内にあります。この2人というのは、土芳でなく、水口町の蓮華寺の僧、寸庵という、俳句をたしなんだ人ともいわれ、その人の墓も現在この寺にあり、桜の木もこの寺の境内にあったという、かくれた話もつけ加えておきましょう。

さて元禄3年の陽春、芭蕉は大津・膳所の医師浜田珍碩をおとずれて、「洒落堂記」を書きました。

(抑々おももの浦は勢多、唐崎を左右の袖のごとくし、海を抱きて、三上山にむかふ。海は琵琶の形に似たれば、松の響き波を調ぶ。日枝の山、比良の高根を斜に見て、音羽・石山を肩のあたりになむ置けり。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月を粧ふ、淡粧濃抹の日日に変わるがごとし。心匠の風雲もまた是に習ふべし)と。

四方より花吹き入て鳩の海 この句碑は最近、膳所御殿浜に、蕉翁 280回忌を記念して建立されています。

おももの浦は膳所のことであって、おもものは御膳で、天智天皇の大津京のころ、そこに調膳所があったので、そう呼ばれたそうです。

鳩の海は琵琶湖のことで、鳩は、かいつぶ

りのことです。句は四方からの花を吹き入れ、それをうかべる鳩の海というだけですが、春風胎蕩、花盛りの頃の琵琶湖の大景が浮んできます。

珍碩は、はじめは珍夕ともいい、後に洒堂と号したのは、洒落堂を略したものです。この洒堂は、「ひさご」という本の編者となり、また「深川集」をも編んでいます。

膳所は本多氏六万石の城下町で、水にうつる膳所の城とうたわれた天守閣や城壁は、古図でしのおほかはありませんが、湖岸随一のながめといわれたものです。

膳所藩士で、蕉門に学んだ者も少なくありませんが、中でも菅沼曲水・水田正秀が中心でありました。更に大津の伝馬役、川合乙州、その母智月、大津の医者、望月木節と洒堂、また乙州らを芭蕉に紹介した尚白、千那など実に多士済々でした。芭蕉も恐らく各家々に、引っぱりだこになっただろうと思います。

元禄3年、芭蕉47歳(歳旦吟)「薦を着て誰人います花の春」、1月3日、膳所を去り、伊賀へ帰ります。3月中頃膳所に出て、珍碩・曲水と改めて歌仙興行。4月6日幻住庵に入り、6月上旬から18日まで京の凡兆宅に滞在、7月23日幻住庵を出ます。このころ「幻住庵記」の草稿が成り、8月15日、木曾塚で、月見の句会があり、9月末再び帰郷して、この年の暮れには、大津の乙州宅で越年しています。

元禄7年5月17日、大津に来て、その22日に落柿舎に移り、6月15日に膳所に移り、その後また京に滞在して、盆会のため7月中旬帰郷し、8月15日、伊賀新庵で月見の会をもち、自ら献立を草しています。9月8日、支考・素牛らに付き添われて伊賀を出て、9日夕刻大坂に着。10・11日のいずれかに、不和

であった之道・酒堂両門の「打込之会」が催されたと思われます。病気を押して俳席に出ていましたが、9月29日に臥床し、10月5日、南御堂前に病床が移され、10月8日、

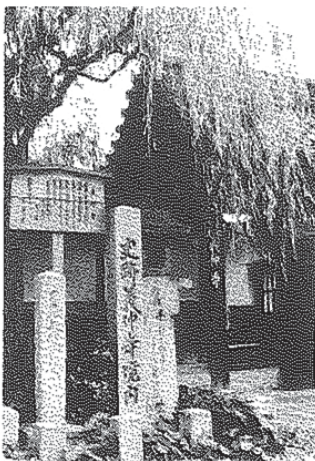
「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」の病中吟」が成り、10月12日申の刻、没しました。わずか年51歳でした。

義仲寺と芭蕉

昭和46年、豊書房から、北川静峰氏編、「義仲寺と芭蕉」が発行されています。その序の中で、梅原黄鶴氏が、「思うに本書は義仲寺在庵の蕉翁の姿を、既存の文献と新しい発掘によって写し出すもので、彫塑の例でいえば、これは型であり、素材である。これを肉付けするのは、読者の芭蕉に対するあこがれ、俳文学によせる美意識によるのである云云」と、書かれています。

またその「あとがき」に北川静峰氏が、「貞享2年、芭蕉翁が天津に千那・尚白を訪れてから、元禄7年10月12日、浪花の花屋に没し、同14日義仲寺に於て、葬送の時までの約9年間は、芭蕉俳諧の最も円熟した時代である。特に近江の幻住庵、義仲寺を仮の住居として、

唐崎の 松は花より 臍にて
天津絵の 筆の始めは 何仏
三井寺の 門た、かはや けふの月
鎖あけて 月さし入れよ 浮御堂
比良三上 雪さしわたせ 鷺の橋



義仲寺 山門



芭蕉翁墓 義仲寺

ひるかほに 昼寝せうもの 床のや満
等々、多くの名吟を残し、又多くの近江の俳人と交友指導したなどを、書簡を中心に年譜風に記述したのが、この編である」と書かれています。

近江の句碑

昭和44年、滋賀俳文学研究会から「近江の句碑」が発行されています。その序文に、北川静峰氏が「近江の句碑も随分とあるものだ。ゆかりの地に、ゆかりの句碑を訪ねてみることは、楽しいことである。さて訪ねてみると存外ゆかりの地でないところに、ゆかりのない句碑が建てられている。しかしこれも故人を敬慕する一念からであろう云云」と書かれています。またそのあとがきに、乾 夢望氏が、「ここに本書を編むについて、私自身いろいろの恩恵を受けている事を知った。そのみでなく、句碑を建立せられた人達の御偉業に敬服したい。

芭蕉の墳墓の地である我が滋賀県に、本書のようなものがあれば、後人の為になんらかの意味でお役にたったであろうと思うと同時に、先輩達の御努力を賛えつつ数年来の希望を本書で示した、云云」と書かれています。

蕉翁句碑めぐりの旅日記

私は去る昭和47年の秋、ふと芭蕉の句碑めぐりを思いつきました。それから早や10年経ちましたが、今日もまだ、この旅日記を書きつづけています。

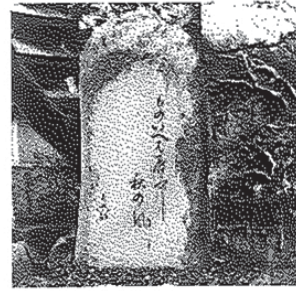
蕉翁句碑は全国に、約1,300か所以上あります。わたしはまだ、現在のところ、600か所余です。この10年間集めた参考書60冊余の中に、大正13年8月5日12版、著者、吉田紘二郎、改造社発行、定価金1円60銭、216頁中、1～103までが、「芭蕉」です。その最後の1行が、「かれ(芭蕉)の顔は聖徒とでも言はれさうな尊さと、寂しさとをもってゐた」。——1922. 11——。

この頁の余白に、ペン書きで、
すんなりと のびた芭蕉や 暮れの秋

多分本屋で、これを買って、下宿にかえて、一気に 100 頁余を読み終り、その読後感として、この一句を、ものせられたものと思います。私は幸いにも、この古本を手に入れたことの幸せだったことを喜んでいきます。

さて私の旅は順を追うての旅とちがって、昨日は東、今日は西という風で、その日、その日の日記ですので、日記とは別に、湖南・湖東・湖北・湖西の順に掲げておきます。

- (1)行春をあふみの人とをしみける 大津市(義仲寺)
 (2)古池や蛙飛こむ水の音 // (//)
 (3)旅に病て夢は枯野をかけ廻る // (//)
 (4)曙はまだむらさきにほととぎす // (石山寺)
 (5)三井寺の門たたかばやけふの月 // (円満院)
 (6)山路来てなにやらゆかしすみれ草 // (小関天満宮)
 (7)先たのむ椎の木もあり夏木立 // (幻住庵跡)
 (8)大津絵の筆の始めは何仏 // (月心寺)
 (9)大津絵の筆の始めは何仏 // (茶臼山)
 (10)叡慮にて賑ふ民や庭かまど // (坂本)
 (11)病雁の夜寒に落て旅寝かな // (堅田本福寺)
 (12)唐崎の松は花より朧にて // (唐崎神社)
 (13)から崎の松は花より朧にて // (近江神宮)
 (14)鎖あけて月さし入上浮見堂 // (浮見堂)
 (15)比良三上雪さし渡せ鷺の橋 // (//)
 (16)四方より花吹き入れて鳩の海 // (御殿浜)
 (17)野洲川や身は安からぬさらし白 野洲町
 (18)へそむらのまだ麦青春のくれ 栗東町總
 (19)つつじいけて其蔭に干鱈さく女 石部町真明寺
 (20)西行の菴もあらん花の庭 甲西町南照寺
 (21)ものいへば昏寒し秋の風 // 西照寺
 (22)木のもとに汁も膾もさくらかな // 園養寺
 (23)命二ツの中に生たる桜哉 水口町大岡寺
 (24)さみだれに鳩のうき巢を見にゆかん 土山町常明寺
 (25)灌仏や皺手合する珠数の音 甲賀町称名寺
 (26)行く春を近江の人としみけり 甲南町岩尾山
 (27)松茸や知らぬ木の葉のへばりつく 信楽町玉桂寺
 (28)木隠れて茶摘もきくやほととぎす // 大谷昌雄氏庭
 (29)木隠れて茶摘も聞くやほととぎす // 上朝宮仙禅寺
 (30)はがれ堂類身に波きぬたのひびき哉 日野町別所
 (31)葱白くあら飛上たる寒さ哉 日野町遠久寺



ものいへば昏寒し秋の風 はせを 先たのむ椎の木もあり夏木立
 甲西町西照寺 幻住庵跡

- (32)観音の褰見屋里つ花の雲 日野町鎌掛正法寺
 (33)一声の江に横たふやほととぎす 近江八幡市願成就寺
 (34)比良三上雪さしわたせ鷺の橋 近江八幡市願成就寺
 (35)蝶鳥の知らぬ花あり秋の空 永源寺町左林
 (36)こんやくの刺身も少し梅の花 // 永源寺
 (37)八九間空で雨降るやなぎかな 五個荘町小幡
 (38)折々に伊吹をみてや冬ごもり 彦根市高宮神社
 (39)ひるかほに昼寝せうもの床のや満 // 鳥居本床の山八幡宮
 (40)御命講や油のやうな酒五升 長浜市地福寺町成田氏庭
 (41)をりをりに伊吹を見てや冬籠 // 宮前町八幡神社
 (42)四方よりはなふき入て鳩の海 // 下坂浜町良疇寺
 (43)夕顔や秋は色々のふくべかな // 今町姉川畔
 (44)蓬來にきかばや伊勢の初だより 長浜市市民会館前
 (45)行春を近江の人と惜しみけり 虎姫町姉川畔北詰
 (46)田一枚植えてさりゆく柳かな 浅井町西主計
 (47)ちちははの頻りに恋し雉子の声 // 福良の森
 (48)そのままに月もたのまじ伊吹山 山東町護国寺
 (49)たふとかる涙やそめて散る紅葉 高月町観音堂
 (50)今日斗り人も年よれはつ時雨 今津町石田墓地
 (51)四方よりはなふき入て鳩の海 志賀町白鬚神社
 (52)もろもろの心柳にまかすべし 新旭町太田神社

以上52基をあげましたが、まだどこかにあるような気がします。

これからも多くの先輩たちに教えてもらいつつ、芭蕉の顕彰の一つとして句碑を訪ね歩きたいと思いつつ筆をとめます。

近江教育、第605号、第606号を参照して下さい。

(源 信彦氏提供)